

光明団創立十五周年大会記

奉白文

維時昭和八年十二月四日、大日本真宗光明団創立十五周年記念会を開き、仏子狂風、恭しく本師法王阿弥陀世尊の本願海に合掌し謹みて白す。

我等肉身を渺々たる生死海に受けて、光明照護の念力により、宿縁多幸にも遠くは大恩教主釈迦牟尼世尊より、近くは親鸞聖人の化導を受け、南無阿弥陀仏のみ名により、弥陀善逝の淨華の衆たることを得てよりこのかた、仏智自然の業力にひかれて、往相願生の大行に生くることを得たり。

慶喜彌々至り、至孝彌々重し。

然るに大行讚嘆の大会衆門は図らずもここに多くの御同行御同胞を集合せしめぬ。もとより志を同じうする輩集りて、同信一致、歩みを共にするもの、これを光明団と言えり。爾来星霜何時しかに十有五年を経たり。この間、造次にも顛沛にも大悲の化育を受け、以つて今日に至ることを得たり。もとよりこと聖なるみ業に属す。世尊の聖意によらずんば、何ぞ一偈一行すら聞くことを得ん。況んや大法の宣布に於ておや。然れども大心海に結ばれたる同胞のよく聖意に相應して一、意専心の精進を致せるもの、本団の今日あるを得たる大因なり。

ここにこの聖筵を開き、諸仏菩薩の照覧の前に、唯感謝山の如く、懺悔海の如くなるを感じるのみ。

惟うに久遠寂照の大義門に在します如来の威神に何ぞ無常轉變あることあらん。然れども生死流転の群萌は唯生死海に沈没し、徒らに三毒の虜となり、二諦の真理に味くして永遠に苦海に迷妄せり。

今やこの聖会を営むに当り、いよく大悲本願にもよおされ、自信教人信大悲伝普化の菩薩行に則り、身を法界に捧げ奉りて世尊の恩徳に報ぜんとするや切なり。

願ふらくば秋風落莫の曠野にも、無明暗澹の風雨にも、世尊教主に信順して法剣とりてたじろがず、如何に苦毒の波押し寄すとも、この一行を執持して国土莊嚴の志願に生きん。我が同胞その志もとより変るべからず、今や我等は二行精進の殿堂を建設し、長く如来の慈光に浴し、以つて学仏道場たるの実を挙げなんとす。

ああ！慈悲の父母、希くば我等が行歩をして聖旨の如くならしめ給え。棄つべきは棄て、とるべきはとり、長く心行を真如界に典り、金剛の大信を現生に不退に生き、以つて使命を荷負して重擔となし、長く聖恩に報ぜんとす。

世尊の照覧、我等にあり、無量の菩薩の冥護を乞い奉る。

諸天も来つて我等に天華を雨し給えかし。

合掌三杯し、以て奉白の辞となしぬ。あなかしこ、あなかしこ。

昭和八年十二月四日
住岡狂風敬白